

「イギリスのグローバル教育」木村一子,2000

【発表構成】

1. はじめに
2. ワールド・スタディーズについて
3. 具体的な単元「食べ物こそ第一」
4. おわりに

1.はじめに

本発表は、木村(1998)『イギリスのグローバル教育』を中心に、ワールド・スタディーズの中で、「平和」はどのように捉えるのかを明らかにする。そこで、本発表の RQ と SQ を以下のように設定する。

RQ: ワールド・スタディーズは平和をどうとらえ、どのように実現しようとしているのか？

SRQ1 ワールド・スタディーズとは何か？

SRQ2 ワールド・スタディーズの目標は単元計画のなかで、どのように反映されているか？

2. ワールド・スタディーズについて

(1)なぜワールド・スタディーズか

ワールド・スタディーズが成立・展開される前、それまでにイギリスで展開されていた多文化教育、開発教育、平和教育など様々な教育論が構想されている。ワールド・スタディーズはそれらの成果まだ不十分な点が残されていると捉え、グローバルな理解と自己探究との総合を図ろうとした点に着目した。

(2)このような背景をもって、ワールド・スタディーズが生まれた

1952 年、イギリスの教育福祉法人財団ワンワールドはワールド・スタディーズを発足させた。この財団は当初、歴史教育におけるセミナーや出版物を多く手掛けるが、1966 年頃から、国際教育として“ワールド・スタディーズ”という呼称を用いるようになった。1973 年、ワールド・スタディーズプロジェクトが正式に発足した。

(3)ワールド・スタディーズの掲げる目標はどんなものか

一、知識目標：

①私たちと他の人々

自分たちの社会や文化、その中で自分たちのしめる位置について知る。また、自分たちの社会の中のマイノリティの文化を含めて、自分たちのものとは異なる社会や文化について知る。相互依存の本質、そして経済や文化が他の人々の生活様式に与えた影響（好影響および悪影響）について理解する。

②豊かさと貧しさ

国内および国家間には、富と権利に大きな格差があることを知る。そのような不平等が存続している原因、その格差を縮めるために試みられている努力について理解する。

③平和と対立

現在報道されている対立や近年起きた主な対立、および、それらを解決しようとする試みについて知る。また、日常生活における対立を解決する方法についても知る。

④私たちの環境

地球の地理・歴史・生態に関する基礎的な知識を得る。人間と地球とが相互に依存し合っていることを理解し、地域と地球規模で環境を守るためにどのような対策がとられているのかを知る。

⑤明日の世界

個人・地域・国家・世界全体の未来像について、どのように研究したり考察すればよいかを知る。また、どうすれば未来に対し自分たちが影響をおよぼしていけるのかを知る。

二、態度

①人間としての尊厳

個としての自分自身の価値、他者の価値、自分の属する社会・文化・家族などの背景がもつ固有の価値を尊重する。

②興味・関心

多文化の社会、相互に依存しあう世界で生活する中で生じている問題について、もっと知りたいと思うようになる。

③他文化の尊重

他の文化の様相を自分たちにとっても価値あるものとして認め、それらから学ぼうとする。

④共感

他の人々、特に自分たちとは異なる文化や状況の下にある人々の気持ちや考え方を、進んで想像しようとする。

三、技能

①調査

印刷物、視聴覚機器、他の人々とのインタビュー等の様々な情報源から、世界の問題にかんする情報を見つけ出し、記録することができる。

②コミュニケーション

他の集団や文化に属する人々など、いろいろな人々とともに、書く・話しあうなど種々の方法で、世界についてどう考えるのかを記述し説明することができる。

③概念の把握

世界に関する基本的な概念を理解し、その概念をもちいて一般化したり、それを裏づけ検証することができる。

④批判的思考

批判的かつ開かれた目で問題にとりくみ、学習が深まるにつれて自分の考えを改めていくことができる。

⑤政治的技能

地域・国家。国際社会の各レベルでなされる決定に、影響をおよぼすことのできる能力を育成する。

ここで、SQ1を以下のように答えることができる

1960年代後半、イギリスのワンワールド財団が開発した、多くの文化が存在し、人々が相互に依存し合う世界で責任ある生き方をするのに不可欠な知識、態度、技能を身につけるためのカリキュラムである。

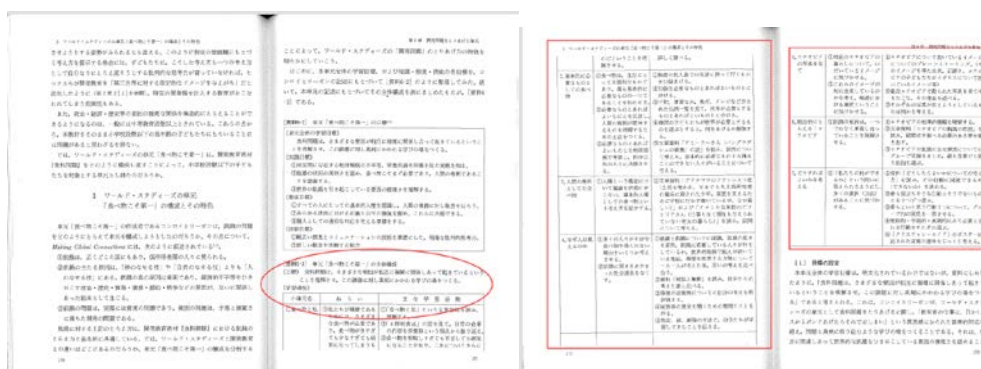
3. 具体的な単元「食べ物こそ第一」

上記で述べたように、ワールド・スタディーズが設定した目標を、どのような授業をすることにより、達成しようとしているのかを明らかにする。ここでは、ワールド・スタディーズのテキストの中で「開発問題」を扱った単元「食べ物こそ第一 (food comes first)」を取り上げる。

①目標：食料問題は、さまざまな要因が相互に複雑に関係しあっているということを理解させ、この課題に対して真剣にかかわる学び場をつくる。

②全体構成

別添資料「第6章 開発問題を取りあげた単元 pdf」171-173ページを参照してください。



小単元1~3においては、まず、食べ物と「私」ととの関係をとらえることにより、食べ物が入間にとって重要なものであることを理解させようとしている。続いて、食べ物は「人間」の生存にとって本質的なものであり、基本的な権利であることの理解へと発展させている。具体的事例を提示し、食べ物を得られないときの痛みや危うさを共感的に理解させ

ながら、基本的人権としての食べ物という考え方を理解させようとしている。このように「私」から出発し、小单元 4 において社会事象としての飢餓の問題を考察するに至るまで、共感的な理解を重視することにより「私」から問題が遊離しないように学習を構成している。

小单元 4～6 においては、まず、十分な食べ物を得られない人々がいる原因について、自分たちが偏見をいだいたまま理解していたことに気づかせている。そして、自分たちがマスコミ報道等を通じてつくられたイメージでとらえていたことに気づかせようとしている。このように、エチオピアの飢餓はいくつかの原因が重複しあって起きたのだということを理解したうえで、子どもたち自身がエチオピアの飢餓についての探究をはじめようように構成している。自分たちの見方・考え方を意識すると同時に、それが何に影響されて形成されたものであるかを認識したうえで、新たな見方・考え方を形成するための探究をおこなわせようとしているのである。

最後に小单元 7 において、「私たち」に何ができるかという問いかけをとおして、飢餓に対する対応にはさまざまなアプローチがあることを理解させようとしている。

ここで、SQ2 を以下のように答えることができる。

SA2：子どもの身近な問題から、同心円のように拡大し、子どもたちを学習の主体におき、授業を主体的な学びの出発点として位置づけることは、ワールド・スタディーズの重要な特色の一つであった。「私」を基底において単元構成をすることにより、グローバルな理解と自己探求との両立をはかり、遠いアフリカで起きた飢餓の問題を自己の生き方とかかわらせながら、探求を続けさせようとしていた。

SQ1 と SQ2 を踏まえて、RQ を以下のように答えることができる。

RA：ワールド・スタディーズが考えている平和とは、自分たちの国や文化と異なる他の国の社会や文化を理解し関心を持ち、多文化が共存し、人々が相互に依存しあう世界のこと。

4.おわりに

以上で述べたように、ワールド・スタディーズは“他の人たち”についての学習（「外の旅」）を社会的見方・考え方の自己探求を目的として行う“他の人たち”からの学び（内への旅）となるように学習を位置づけることにより、外のことを理解し、自分のことを考え直す。貧困問題とか、飢餓問題とかを他人事だと思わず、相互に理解しあって、グローバルな理解と自己探求を統合することを主張している。